幽玄

題字　高秀秀信

横浜能楽連盟
会報 No.65
令和5年4月1日

前を向いて 新たな一歩を

会長　馬場　洋一

令和5年に入り、横浜能楽連盟は、また新たな一歩を踏み出しました。「第26回五流交流のつどい」を4年ぶりに開催（3月18日）したことで、令和4年度は主催事業をすべて執り行うことができました。「コロナ感染症対策を講じ、会場のガイドラインに沿って」という制限つきの開催でしたが、それでも明るい先行きが見えたような気がしています。

国は水際対策の緩和、マスク着用の見直しなど、アフターコロナに向けた方針を示していますが、新規感染者の数字を見ると、これまでと変わらず、我々自身が各々対策を講じることを求められる状況です。今回の感染症の拡大は全世界に打撃を与えましたが、横浜能楽連盟も大きな影響を受けました。高齢化に伴う会員数の減少に加えて、大会が開催できないことで、年会費・大会参加費が原資となる収支が、この3年赤字続きとなりました。この赤字は、能楽振興基金を切り崩してかろうじて乗り切りました。けれど、会費および大会参加費収入で運営できる財務体質に変えない限り、このままでは基金を食いつぶしてしまいます。令和4年度は、経費の見直しと大会の開催でかろうじて黒字に転換できましたが、今後は何としてもこの収支状況を安定的に続ける仕組みを作らなければなりません。

社会の高齢化が進む中で、「会員数の増加」は10年以上前から連盟の命題となっています。中長期的課題としては、例えば若年層に入会してもらえる工夫など、様々な方策の実施が必要です。一方、短期的課題としては、会員数の減少、収支の悪化という「負のスパイラル」への対応が、急務となっていることも事実です。理事によるすべてボランティアの運営の限界にも、目を背けてはいられないでしょう。これまでの能楽連盟には、こうした課題に取り組む余力がありませんでした。そこで解決策の一つとして、令和5年度は事業を見直すことにいたしました。

まず、「幽玄」の編集・発行方針の変更です。毎年9月と3月に発行してきましたが、令和5年度からは年に1回、4月1日の発行とします。発行回数の減少により編集担当理事の負担が軽減され、郵送料等の付帯経費が少なくなります。その代わりとしてページ数を増やし、今まで掲載できなかった記事を多く掲載します。

また、大会の開催時間、各流派の持ち時間の配分などを見直し、参加しやすい大会を目指します。この数年の会員数の変動などを反映して、10月の「五流能楽大会」から適用することとします。

この2点の他に、もう一つ大きな課題があります。既にご存知の通り、横浜能楽堂が令和6年1月から大規模改修工事に入り、2年半閉館します。その間の代替会場として、横浜市磯子区民文化センター「杉田劇場」を利用させていただけることになりました。来年3月の「つどい」からは、会場が変更となります。利用する我々も受け入れる劇場も不慣れな中となりますが、新たな会場での運営を模索し、今後に反映させる好機と考えています。幸い杉田劇場はJR新杉田駅の目の前ですので、アクセスの良さを生かして一般の観客にアピールし、理解を深めてもらう機会にするなど、利点を探して将来に生かすことができるはずです。

このように幾つもの問題を抱えた令和5年度ですが、すべてをチャレンジと捉え、前向きに取り組んでまいります。

☆お知らせ☆

◎「第39回横浜五流能楽大会」
10月14日（土）開催予定
会場　横浜能楽堂本舞台・入場無料
五流各団体により、素謡・仕舞などが演じられます。
各流派が同一曲を演じる五流競演もあります。

◎「第27回五流交流のつどい」
令和6年3月9日（土）開催予定
会場　杉田劇場（横浜市磯子区民文化センター）
・入場無料
五流各団体により、素謡・仕舞などが演じられます。
学生による特別招待出演もあります。

3年ぶりの開催 五流能楽大会報告

担当流派・宝生流　井上　豊年

２０２２年10月８日（土）、３年ぶりに「第38回五流能楽大会」が、当番幹事宝生流にて予定通り開催されました。コロナ禍の中ではありましたが、万全の感染対策のもと、無事終了してホッとしています。

延べ参加者数は約３００名で、総番数40番、五流競演曲は「紅葉狩」でした。約10分の遅延で終了しました。

〈当番幹事として〉

連盟の事務局が作成してくださったマニュアルに従って、同年3月から当番幹事の仕事が始まりました。私にとっては全く初めての経験であった上に、感染症拡大の波を繰り返すコロナ禍での開催、準備期間の7か月は長くもあり短くも感じる手探りの連続でした。五流大会とつどいを合わせて過去5回、残念ながら中止の決定がありましたが、今回はおそらく開催できるという予測のもとに、理事会の雰囲気も期待感が高まっていました。とは言え、出演者の方々の2年半の長いブランクと、未経験の感染防止対策もあり、当日の運営がうまく運ぶか不安でいっぱいでした。

さていよいよの当日は、皆様待ち望んだ開催とあって、ひと手間増えた感染対策にも積極的に協力してくださり、心配は杞憂と消えました。部屋割りの張り紙や茶菓の取りやめ、楽屋の利用人数制限、見台を持つ前の手消毒についても、切戸口や受付などのスタッフは口を揃えて一言のクレームもなかったとの感想でした。また、楽屋使用の人数制限への対応として、素謡や連吟の出演者が廊下の一角でグループの手荷物をまとめて管理されているのを見て、感心と感謝で心が和みました。

一般に言われているように、コロナ禍はそれによる被害や負荷が大きかった一方で、新しい気付きがあってポストコロナでも継続できるものが見えてきたのも事実です。たとえばリモートです。今回の番組製作では、一度も印刷所に出向かずに番組が刷り上がりました。メールの活用によりこれまで紙が主流だった案内状のペーパーレス化、また楽屋での茶菓や張り紙の省略、等々です。

コロナゆえに保てなかった世界遺産である能楽の美観と品格は取り戻したいが、その他のこと全てを元に戻すのではなく、コロナ禍をきっかけにいろいろな変化があり、気付きによって得たものは、ポストコロナでも維持していくことが、コロナのレガシーではないでしょうか。

五流大会の醍醐味は、流派を越えた能楽趣味のつながりに遭遇できることで、たまに出会う非日常、いわば海外旅行のようなインパクトがあるのではないでしょうか。自流では見慣れない作法や様式を、進行係として目の当たりにしたこともあります。他流のことは完全には理解できなくても、認め合うことが大事かと思います。

最後に、ご協力いただいた他流連盟会員の皆様と能楽堂の方々、そして宝生流のスタッフの皆様に感謝申し上げます。

私と能楽との出会い

観世流　堤　美代子

私と能楽との出会いは、今から10余年前のことになります。「謡のお稽古をしませんか」という一枚の張り紙から始まりました。張り紙を見た私が、両親の残した古い謡本で、懐かしくも楽しい稽古を始めたのは言うまでもありません。

私の両親は、私が10歳くらいの頃から謡の稽古をしていたようです。両親が稽古に行ったり何か催しがある時は、いつも一緒でした。私にとってそれは苦痛ではなかったのです。両親の稽古中、本を読んだり、時には学校の宿題をしたりして。

子方のある曲があると、会に出していただいたりもしていました。そんな時は、父に教えてもらっていました。いわゆる口伝です。「門前の小僧習わぬ経を読む」などと言われたりしていました。

小学校の学芸会で舞ったこともありました。今はほとんどが体育館ですが、昔は入学式・卒業式などは講堂でやっていました。そこには舞台があり、生徒達は劇をやったりダンスをやったり合唱をやったりしていたのですが、同級生に喜多流を稽古していた友達がいて、クセとキリとに分かれて「羽衣」を喜多流の先生の謡で舞ったのです。懐かしい思い出です。

そんな子供時代を過ごして、社会人となり、結婚・子育てを経て、時間的に余裕のできた頃になって、あの「張り紙」に出会ったのです。

私にはもう一つ、朗読という趣味がありまして、仲間を通して色々な本にふれると同時に、発声・表現・間の取り方などを学んでいます。一緒に勉強している仲間達が、私の所属する白謡会の発表会を見に来てくれ、「堤さん、これは、朗読、謡のお互いにプラスになっているわね！」と言ってくれました。

懐かしい、楽しいばかりではありません。先生をマネして謡ったり舞ったりしている私ですが、ゴマ点をはじめ様々な記号がなかなか難しいのです。それでも、とても褒め上手な先生のご指導の下で、次々と新しいものに挑戦しております。

高校生の頃に拾い読みした『花伝書』。その奥義「秘すれば花」、はるか彼方にある花を求めて、歩む日々です。

「道遠し、されどいまだ日暮れず」

古都にて
謡の世界を感じる

観世流梅若会　**五木田　悦子**

十分な計画を立てた旅を好む私だが、なぜだか京都へだけは「ちょっと行ってくる」と、翌日には新幹線に乗っていたりする。そして、その度にあてもなくひたすら歩く。

ある日、嵯峨野嵐山駅に降り立った私は、珍しくその場で野宮神社に行こうと決めた。「野宮」の謡の稽古を終えたばかりのせいもあるのか。

竹林の小径の途中にあるのだが、いつもは素通りしていた。比較的朝早い時間ということもあってか、他の観光客もまばらでひっそりとしている。まずは正面の鳥居。これが「黒木の鳥居小柴垣…」か。謡そのままの佇まいは、幽玄で見入ってしまう。進むと、嵐山の景観を表現した美しい絨毯苔の庭もある。六条御息所が伊勢へ下る前に籠った処。光源氏との昔を懐かしみ切なさが募るばかりだが、決別しなくてはならない立場。車争いで負けた葵上への妄執の囚われから救って欲しいと願う。その時の御息所の心情を、謡の流れと共に想像してみる。

高貴で聡明な女性でありながら、寂しい境地に追いやられても本心を押し殺すことを選ぶ。そして、次第に心の奥底に嫉妬を宿すようになる。その姿に、生きることの悩みの深さ、思いの深さが伝わってくる。現代にも相通ずるものがあるが、単に世の常とかたづけては浅はかだろう。竹林へ出た帰り道、野宮神社は縁結びの神様だったことを思い出し、ふと立ち止まってしまった。

幻想の世界に迷い込んだような感覚を覚えたその時から、京都での散策のひと時に、謡にちなんだ場所を訪れる時間を作るようになった。そうすると、これまでに見てきた寺や神社に違った趣を感じるから不思議なものである。

鉄輪―貴船神社、小鍛冶―伏見稲荷神社、土蜘蛛―北野天満宮…。熊野が病身の母を思いながら歩いた清水寺までの道のりは、幾度となく巡っている。

こうして一曲ずつ思いを馳せる楽しみは、今では欠かせないものとなっている。未だ訪ねていない処が幾つもあり、京都への旅はこれからも続きそうだ。想像から創造が生まれる。私も創造的な世界で謡い、能を鑑賞できるよう、稽古を重ねていきたい。

能「羽衣」の時のこと

宝生流　**矢部　夏子**

3年前、四十歳になった記念の挑戦として、初めてお能を舞わせていただくことになりました。天女の無垢な姿勢に向き合ってみたいと思い、「羽衣」を先生にお願いしました。

「なうその衣は…」とワキの白龍に呼びかけて、橋掛かりへ進みます。宝生能楽堂の長い橋掛かりを、緊張に耐えつつ慎重にまっすぐハコビ続けます。シテ柱まで来たあたりで舞台の微妙な傾斜を感じたら、次は太鼓方の手前で左足をかけて正面へ出ます。横板の終わりを足袋の裏で感じたら、そこから八足ほど。最後の一足は特に丁寧にして、右・左と揃えてやっと到着です。

これらを、ワキ方との問答をしながら行うので、ハコビと謡と、ワキ方の謡をよく聞くこと、場所を正確に取ること、いくつものことを同時に意識しなければならず、大変です。面と重たい装束をつけて…。

問答による「芝居」が大切な場面ですので、意識は特に謡のほうへ集中します。ハコビは、無意識のうちにあってもできているように、何度も稽古して体にしみこませました。

ハコビについて先生は、「つま先は上げようとするのではなく、逆につまむような感じ」とおっしゃいます。私のハコビは足をかけて向きを変えるときなどに小指側だけ持ち上がってしまう癖があります。分かっていてもなかなか直せていません。

白龍が衣を返してくれると言うので、「あら嬉しや」と一足出ます。しかしすかさず、「しばらく」と遮られ、一足引きま

す。嬉しく明るい気持ちの一足、逆に心が曇るような一足。一足のうちに大切な表情をこめたいところです。これが私の場合、後にそろえる方の足がビュッと雑になってしまいます。さらに真っすぐそろえたつもりのつま先は、前後にずれていたりします。足の間をきっちりと閉じてカマエを保つことも、とても難しいです。先生のような小さくて品のある美しいハコビに憧れます。

八十歳になった時にまた「羽衣」を、盤渉の小書で舞うのが目標です。

「橋弁慶」を謡う

喜多流　**保木　豊忠**

「では謡います」

新しい謡が始まった。ビデオカメラのスイッチを入れる。鉛筆を持って謡本にルビや節を入れていく。太い声が流れた。はきはきした声を作っていこう。元気に謡う、気張って謡おう。

「それは、韻を踏んだ謡」

ハッキリ言葉を出していたら韻を踏んだ謡になっていた。自分では結構気に入っていたのだが。ラップにもこんなふうに韻を踏んだ歌い方があったなということが頭をかすめる。次は速さ。軽快に謡いたい。だが、その速さが出ない。目がついていかない。こうなったら耳から口である。

「始めから謡って」

始めのところはまだ習っていない。読めない、見えない、調子どころではない。ようやく習ったところに来た。やれやれ。

「子方、お願い」

発表会に向けた役割分担。牛若。思い出せない言葉に○▽□を謡本に書き込む。出かけるときには、ポケットに入れる。なぜか、覚えるには通勤の朝が効果的に感じる。

「橋弁慶」で若返る

謡本では一番初歩の曲で、位も軽くさらりと謡うが、シテだけは弁慶らしく強々とした大きさで単純である。地も心持なくはきと運び、後は勇ましく明るい、とある。大きな声、はっきりした言葉、立ち廻りでのスピード感。「橋弁慶」は若返る。

強し、牛若

「牛若は、少しも騒がず突っ立ち直って、薄衣引除けつつ、静々と太刀抜き放ち、突っ支えたる薙刀の、切先に太刀打ち合はせ、詰めつ開いつ戦いしが、何とかしたりけん、手元に牛若寄るぞと見えしが、何とかしたりけん、手元に牛若寄るぞと見えしが、畳み重ねて打つ太刀にさしもの弁慶合わせかねて橋桁を二三間、退って肝をけしたりけり」。

強い。これは明けても暮れても平家に謀反を起こすことばかり考えているから、なせることなのだろうか。現代では、野球の大谷翔平、将棋の藤井聡太の物語を創ると、このようなことになるのかもしれない。

さて、日本人と日本文化

司馬遼太郎とドナルド・キーンの対談の中に、「室町時代から日本文化が広まり、謡曲狂言の言葉が普及して、それが期せずして標準語運動としての効果をあげていき、広めていく」とありました。

だから、私の能の稽古はやめられない、と思っています。

能を楽しむ

金春流　**小林　庄一**

伝統芸能に親しみ、その伝統芸能が未来に向けてより発展するためには、皆が何をすべきなのでしょうか？多くの人が興味を持って鑑賞することですね。自分で体験することも興味を持つきっかけでしょうが、メディアが取り上げて宣伝することも効果があるでしょう。能を取っ付きやすく解説する番組が多くなることに期待ですね。

自分のきっかけは能画です。横浜そごうで絵の展示会があって絵の教室があることを知り、参加しました。能の舞姿の日本画です。教師の瀧川先生は能舞台の松の絵を描かれていて、鎌倉の八幡宮前の能舞台の松も若い頃に手がけられ、近いところでは阿佐ヶ谷の神明宮の能舞台の松を新しく描かれています。修善寺のアサバ旅館の能舞台の松の絵の修復もされました。

能画はお手本を写し取り、墨と筆でまず線を描きます。これがなかなか難しい。着色も岩絵の具を膠で溶くことから始めますが、色は多少ごまかせても線はどうにもなりません。何枚かの経験を、生徒のグループ展に出させてもらいました。

そして、先生の能面打ちの教室が鎌倉であることを知り、能画から能面に転向しました。先生の指導と鋭い目なしには面は完成には程遠い。大変残念なことに、先生はアサバでの仕事のあと体調を崩されて亡くなられてしまい、寂しいことです。

また、横浜青葉区のあざみ野フォーラムで仕舞を体験の機会があって金春流の二宮先生を知り、遊山房という所で謡を稽古させていただいています。銀座の金春通りの野外能も何度か訪れました。その時の写真展の会場での講座も拝聴しました。遊山房での教室に女性の生徒の仕舞の指導に来てくださっている安達裕香さんの能を矢来能楽堂にて鑑賞させていただき、国立

▶自作の能面

能楽堂にも出かけました。

能の深いところはなかなか理解困難ですが、綺麗な衣装と動き、音の魅力も大きく、楽しませていただいています。楽しむ層の拡大を願い、能の発展を願うところです。

オンラインでお稽古を

金剛流　**宮崎　信弥**

私たちは株式会社ＩＨＩの体育文化活動の一環として、社内に以下の通り謡曲部を紹介しています。

皆さんは「謡曲」をご存知でしょうか？謡曲は、世界最古の歌劇である「能楽」のセリフと謡（ウタイ）を演じる朗読劇です。能楽と聞くと退屈なイメージかもしれませんが、自分で演じてみるとストーリーが深く理解できて、そして大きな声を出して気分転換ができるのでとても楽しいです。

私たち謡曲部は、１９６５年（昭和40年）に設立されてから、社内の豊洲や田無の謡曲部との交流発表会や、地域の発表会での活動を、続けてきています。発表に向けて、毎週金曜日の定時後に社内体育館の和室でお稽古を積んできました（お稽古後の直会も楽しみに…）。

しかし、２０２０年春に新型コロナウイルスの感染が広がり体育館が使用できなくなって、お稽古ができなくなりました。数か月経ったころに、謡曲の技術低下が心配になり、オンラインでお稽古をすることを決めました。部員にはＯＢの方も多く、パソコンの扱いに慣れていない方がオンライン会議（teams）に接続できるようになるまで、毎週1回の試行で2か月ぐらいかかりましたが、お稽古半分、おしゃべり半分の有意義な時間が過ごせるようになりました。コロナ禍の2年半の間、発表会は中止または延期され、２０２２年1月に再開しました。面着で謡うのは久しぶりでしたが、オンラインで毎週会ってお稽古しているので、息の合った謡を披露できました。

コロナ禍が沈静化して面着でのお稽古が再開できるようになった場合も、天候や参加者のご都合によっては、オンラインお稽古や、オンラインと面着の「ハイブリッドお稽古」を活用すると思います。

部員はいつでも募集していますので、この記事を読んで気になった方は、ぜひお声がけください！（金剛流・横浜謡曲部）

コロナ禍で得たもの

下懸宝生流　**目黒　アイ子**

昨年10月に開催された「五流能楽大会」に、私の所属する峰謡会は素謡「湯谷」で出演いたしました。私はシテ役をいただいておりました。コロナの影響で大会が二度も中止になり、中止の発表を聞いた時は複雑な心境でしたので、役目を終えた時は肩の荷が下りたようでホッといたしました。

お役が決まった当時は入会して4年目になっていましたが、「シオリ」や「入り廻し」など節の旋律や、下調の伸ばす声に自信を持てずにいました。コロナ禍で緊急事態宣言が出され、お稽古の会場は休館になりましたが、オンラインを利用した稽古に取り組み、慣れない操作に戸惑いながらもお稽古を続けました。その後、行動制限が解除されてグループでのお稽古が再開され、また新たに個人稽古も始まりました。

これを機会に「湯谷」を最初から復習しようと思い、個人稽古をお願いしました。個人稽古では苦手な節やお腹から声を出す謡い方など、納得するまで練習しました。謡本を何度も読んでいると、湯谷が母を思う沈んだ心や、東路に向かう喜びの表情が目に浮かび、湯谷を身近に感じるようになりました。コロナ禍の中、個人稽古と、シテ役という目標のおかげで、真剣に練習に向き合い、以前より進歩した感覚を持ち、落ち着いて大会に臨めたことに感謝しております。

峰謡会では、毎年秋に、久良岐能舞台で発表会を行っています。素謡・独吟・連吟等で番組が作られます。皆が注目する独吟は、好きな謡の中から5分程度ですが、自分の力量に合う謡を選ぶのに悩みます。また先生やお仲間の皆さんが何を謡うのか、番組表を見るのも楽しみです。私は前回「三輪」の中から「千早振。神も願ひのあるゆゑに。人の値遇に。逢ふぞうれしき」と、シテが謡う言葉が好きで決めました。先生から、神様の声なので気高く爽やかに、ゆっくりと謡うようアドバイスをいただき、能舞台を独り占めして気持ちよく謡うことができました。

謡を始めたのは「高砂や」を謡う体験教室に参加してからです。現在お稽古した曲の謡本は24冊になりました。その中から、独吟では「羽衣」「井筒」「三輪」を謡いましたが、次に挑戦したい曲は、「隅田川」です。いつか独吟で謡える日を目指して、お稽古に励もうと思っております。

入会のご案内

横浜能楽連盟では、常時会員を募集しております。会員の方で、同門・同社中にまだ入会されていない方がおられましたら、ぜひ入会をお勧めください。個人でも団体でも受け付けております。入会希望の方は、ホームページまたは事務局へご連絡ください。

能楽堂だより

令和5年4月～12月の公演案内

■■■■■■■■■■■■■■■■

横浜能楽堂長期休館のお知らせ

平成8（1996）年に開館して25年以上を経た横浜能楽堂は、このたび、初めての大規模改修工事を行うことになりました。工事のため令和6（2024）年1月から令和8年6月頃までの約2年6か月間、全館休館いたします。

施設利用は、令和5年12月28日（木）までの予約は通常どおり受け付けます。また再開館後の施設予約につきましては、詳細が決まりましたらお知らせいたします。

休館中も引き続き様々な活動を継続してまいりますので、ぜひご支援ください。

休館予定期間　令和6（2024）年1月～令和8（2026）年6月

■■■■■■■■■■■■■■■■

令和5年4月から12月までの公演予定は次の通りです。ぜひお運びください。

企画公演「この人　この一曲」第1回
4月30日（日）午後2時開演
能「大原御幸」（金春流）本田光洋
S席七千円／A席六千円／B席五千円
▽チケット発売中

第70回横浜能
6月18日（日）午後2時開演
狂言「福の神」（和泉流）井上松次郎
能「花筐」（宝生流）大坪喜美雄
その他、舞囃子・連吟など五流の競演
S席七千円／A席六千円／B席五千円
▽チケット発売中

企画公演「この人　この一曲」第2回
6月25日（日）午後2時開演
能「二人静」（喜多流）佐々木多門
S席七千円／A席六千円／B席五千円
▽チケット発売中

企画公演「この人　この一曲」第3回
7月16日（日）午後2時開演
能「松山天狗」（観世流）片山九郎右衛門
S席七千円／A席六千円／B席五千円
▽チケット発売中

普及公演「横浜狂言堂」〈こども狂言堂〉
7月30日（日）午後2時開演
狂言「柿山伏」（大蔵流）山本則秀
狂言「清水」（大蔵流）山本則重
お話　山本東次郎
▽チケット発売
こども（18歳以下）五百円　5月13日（土）、
おとな二千二百円　6月10日（土）正午から

開館28年謝恩
横浜能楽堂「中締め」特別講演
第4回「お水とりの能」
11月26日（日）午後2時開演
狂言「仁王」（大蔵流）山本則重
能「青衣女人」声明入り
（喜多流）香川靖嗣
S席七千円／A席六千円／B席五千円
▽チケット発売　8月12日（土）正午から

開館28年謝恩
横浜能楽堂「中締め」特別講演
第5回「珠玉の能・狂言」
12月2日（土）午後2時開演
狂言「寝音曲」（大蔵流）山本則俊
能「鷺」（観世流）大槻文蔵
S席七千円／A席六千円／B席五千円
▽チケット発売　9月9日（土）正午から

※窓口販売はチケット発売翌日からとなります。
横浜能楽堂☎０４５（２６３）３０５５

※毎月第2日曜日には**普及公演「横浜狂言堂」**を開催。狂言2番を解説付きでお送りします。　全席指定二千二百円

※今後の新型コロナウイルスの感染状況や政府方針によっては、日程・内容等が変更になる場合がございます。最新の情報は、横浜能楽堂ホームページをご確認ください。

◎連盟後援行事

「第37回神奈川県宝生流謡曲大会」4月16日（日）横浜能楽堂本舞台／第14回「横浜喜多会能楽大会」6月25日（日）久良岐能舞台／第14回「よこはま能の会」7月17日（月・祝）横浜能楽堂本舞台／「横浜宝生流連合会第36回謡曲大会」8月26日（土）横浜能楽堂本舞台／第24回「横浜金剛会謡曲と仕舞のつどい」8月27日（日）横浜能楽堂本舞台／「第38回かもん山能」（日程未定）横浜能楽堂本舞台

◆編集後記◆

コロナウイルスの脅威は多少薄れてきたとは言え、まだまだ感染対策が必要な状況は変わりません。インフルエンザと同程度の症状と言われても、高齢者にとってはかかればダメージは大きいでしょう。

しかし、謡に親しんでいる方は、お稽古に通うために歩き、おなかから大きく声を出して謡うことで、もともとかなり健康には良い生活をしていたと言えます。ようやく各所でお稽古が再開され、大会も開催されるようになりました。来年から大会が新しい会場に変わることで、環境の変化も味わえます。家に閉じこもって無気力になるというフレイル状態から脱却し、生き生きとした謡生活を送りましょう。

＊イラスト・鈴木幸江（観世流）

横浜能楽連盟連絡先
◎事務局　倉藤
ＴＥＬ
○四五－八三五－一二三六一